

内科医が知っておくべき ICU・ERでの薬の使い方

内科診療では、あらゆるセッティングにおいて急変が起こり得ます。限られた医療資源しかない状況で突然のショックや心筋梗塞など重篤な疾患の初期対応を迫られたり、一般病棟でICU並みの管理を要する重症病態や、open ICUで主治医として集学的治療を迫られたりする場面も珍しくありません。

筆者（神宮司）自身も、ERやICUがない急性期病院での管理、大学病院のICUでの希少疾患の管理など、さまざまなセッティングでの重症管理の困難さを経験してきました。これらの経験から、適切な生命維持と迅速な診断、根治的治療の早期導入がいかに重要かを痛感しています。特に、急変時には限られた時間と情報のなかで最善の判断を下し、適切な治療を開始することが予後に直結します。このような緊迫した状況下で、使い慣れていない薬剤を使用することは非常に大きなストレスを伴い、診療の迅速さにも影響を及ぼします。

本特集では、そうした現場での一助となることを目指しています。エビデンスに基づいた情報だけでなく、臨床現場で得られた経験やコツも含め、即座に役立つ内容を提供することに重点を置いています。

今回の特集では以下の項目に焦点を当てています。

①超緊急で求められる薬剤の扱い方

突然のショックや心停止など、超緊急での対応が求められる状況では、迅速かつ適切な薬剤選択と投与が生死を分けることがあります。こうした極限状態での基本的な薬剤の使い方から、特定の状況に応じた応用まで、実践的な内容を述べます。

②重症病態で安定した全身管理が求められる状況での薬剤の扱い方

重症病態では、安定した全身管理が不可欠です。適切な鎮静や鎮痛、循環管理、呼吸管理のための薬剤選択とその調整は予後に直結します。重症管理における薬剤の適正使用とその効果的な管理法を述べます。

③遭遇頻度が低い病態の重症管理で求められる薬剤の扱い方

遭遇頻度が低い病態に対する重症管理では、特定の薬剤の使用を求められることがあります。これらの薬剤は一般的に使用頻度が低いため、その使用方法や管理に関する知識が不足しがちです。こうした比較的稀な病態に対応するための薬剤の選択と使用法について詳述します。

今回の特集にあたり、執筆にご協力いただいた先生方に深く感謝申し上げます。先生方の貴重な知識と経験が詰まった本特集が、内科診療における緊急時・重症管理の薬剤使用に関する知識と技術の向上に寄与し、読者の皆様が安心して診療に臨めるようになることを願っています。



神宮司 成弘

(藤田医科大学
救急総合内科学)



岩田 充永

(藤田医科大学
救急総合内科学)